読書の孤独

中島健蔵

「読み捨てる」ということばがある。本を読むには読むが、読んでしまえばそれまで、という読み方である。これは読み方というよりは、本の質にもよるだろう。しかし、読み捨てるわけにいかない本もある。

ドストエフスキーの『カラマーゾフの兄弟』をわたしがはじめて読んだのは、中学の四年生の時だったと思う。病気になって寝ている時、頼んで買って来てもらった。たいした病気でもなかったとみえて、一気に読み上げてしまった。すっかり夢中になって、わくわくしながら、あの大きなものを読みつづけ、さて読み終わって、窓の外をながめると、世界が変わってしまったような気持になった。草木の色や空の青さまでが、今までとは違う意味を持ちだしたかのように、新鮮に見えたのであった。

それよりも前に、わたしは国木田独歩に驚かされていた。中学の三年ぐらいの時であった。学校の教科書に『武蔵野』の一部が出ていた。ちょうどそのころ、わたしは、今の上馬、当時の上馬引沢に住んでいたのだが、まだまったくの田園で、『武蔵野』に書かれているような風景が、そっくり残っていたのである。教室で、『武蔵野』にぶつかった時、わたしは思わず息をつめた。そして、先生のことばなどはまったく耳にはいらず、ひとりで読みふけってしまった。それからしばらく後に、どこかへ遠足に行った時、ひとりの級友が『牛肉と馬鈴薯』を持っていた。わたしはそれを借りて、汽車の中で読みはじめたが、今度こそ、根こそぎやられてしまった。つまり、ぴたりと来たのである。わたしは、あわてふためいて、翌日さっそく本屋へ行って、そのころ出はじめた独歩の全集の縮刷版を買って来た。これをポケットに入れて、読みに読んだのであった。

戦災で本を焼いた後、まだ戦争中に、ふと例の縮刷版が、神田のある古本屋のショーウィンドーに小じんまりと並んでいるのを見つけた時には、死んだと思った恋人に巡り会ったような気がした。さっそく掛け合ったが、そのころの悪い習慣で、金だけでは売らない。何か別の本と交換だと言う。無理をして、何か大きな本をくめんして来てその本屋にかつぎ込み、奪い取るようにして持ち帰ったが、まったくうれしかったのである。

読み捨てどころではない。そういう読書の経験は、ほかにもいくつかある。松本雲舟の訳したシェンキウィッチの『クオ・バディス』が最初だったかもしれない。メレジュコフスキーの『先駆者』にも、ひどく引き入れられた。それからニーチェの『ツァラトゥストラ』。これは生田長江訳

ドストエフスキー Fyodor Mikhailovich Dostoevskii 一八二一―八一 ロシアの作家。『罪と罰』などの長編小説がある。

『カラマーゾフの兄弟』 カラマーゾフ家の三人の兄弟をめぐる事件を通して、ロシアの過去・現在・未来を描こうとした一大長編小説。一八七九―八〇年刊。

中学の四年生 旧制の中学校は五年制だった。

国木田独歩 一八七一―一九〇八 本名哲夫。明治後期の作家。

『武蔵野』 独歩作の詩的散文。一八九八年発表。

上馬 東京都世田谷区。

『牛肉と馬鈴薯』 独歩の小説。一九〇一年発表。

神田 東京都千代田区。書店が多い。

シェンキウィッチ Henryk Sienkiewicz 一八四六―一九一六 ポーランドの作家。一九〇五年、ノーベル文学賞受賞。

『クオ・バディス』 古代ローマのキリスト教徒の受難を描いた長編小説。一八九五年刊。

メレジュコフスキー Dmitri Sergeevich Merezhkovskii 一八六五―一九四一 ロシアの作家・文芸批評家。

『武蔵野』初版本表紙

であった。ずいぶんかたい妙な訳だったが、今でもいやとは思っていない。次にはボードレールの『悪の華』。このおかげでフランス文学へ飛び込むことになってしまった。こういう読書は、自分に深い刻印を残す。その後、わたしの評価はかなり変わっている。しかし、刻印を消すことはむずかしいようである。

本を読んでいるうちに、何か、ぴかりと光るような句にぶつかることがあるのは、バレリーの言うとおりである。そういう時わたしは、手近にある紙片をはさんでおく。できれば、覚え書きのノートをとっておくがいい。その句だけ写してもいい。そして、そういう時には、必ず本の名とページ数とを書いておくことである。それをやらないと、あとで、どこにあったか思い出せないで困ることが多い。

もしも感想が浮かんだら、日記なり手帳なりに書き留めておきたい。忙しくなると日記どころではなくなるが、自分自身の成長を知るためにも、読書ノートはよいものである。人間は案外、若い時の自分と縁が切れてしまうものである。しかし、ノートが残っていると、自分の成長の首尾一貫性を、ある程度まで保つことができる。人間は変わるものである。しかし、変わり方にもいろいろある。変わるためには、それまでの自分を知っている必要がある。そのために、読書ノートは大いに役に立つ。初めは、いくらかてらいぎみなノートができるかもしれない。あとで読み返してみて、われながらいやだなと感じることによって進歩する。気がつかずにいると、いつまでもそのいやさから足を洗うことができない。あわてずに急ぐことである。時の流れは速い。あわててむやみに本を買い込んで、読みきれずに投げてしまうのはつまらない。どんなに無理をしても読み捨てることさえできないような、むちゃな本の選び方は、まったくのむだである。

食卓で、物を食べながら本を読むのは、きわめて悪い癖である。よく漫画などで見かけるが、亭主が、食卓につきながら新聞を広げて読んでいる。細君はそれを気にしておこる。あたりまえなことである。まさか宴会や招待の席で、ひとりで本を読む人間はいないであろう。しかし自宅では、つい食事の前など、もう皆が食べはじめているのに、いつまでも本を放しきれないでおこられることがある。せっかく家族で食卓を囲んでいるのに、どうしてそんな本なんか読むのか、少しは話でもしたらどうかなどという不平が出るのは、あたりまえである。これは明らかな無作法である。

ところが、あいにく、本に夢中になっている時の人間は、家族も何も忘れてしまうほど孤独なのである。おしゃべりをしながら本など読めるものではない。何か聞かれても、せいぜい生返事をするぐらいのところで、しつこくじゃまをされれば、読んでいるほうでおこりだすであろう。気にならない人間ならば何人いても平気である。周囲にどんな音がしていようと平気である。電車やバスの中で本が読めるのはそのためである。しかし、本が読みたい時には、どんなに親しい相手でもじゃまになる。電車の中でこれを読んでやろうと思って、本を持って出る。あいた席に腰をおろして、さて読もうとして本を開いたとた

ニーチェ Friedrich Wilhelm Nietzsche 一八四四―一九〇〇 ドイツの哲学者・思想家。『ツァラトゥストラ』原名「ツァラトゥストラはかく語った」。超人主義を基調とした哲学的叙事詩ともいうべきもの。一八九一年完成。

ボードレール Charles Baudelaire 一八二一―六七 フランスの詩人。象徴派の先駆をなし、近代詩の領域を開拓した。『悪の華』ボードレールの詩集。その後の近代詩に多大の影響を及ぼした。一八五七年刊。

バレリー Paul Valéry 一八七一―一九四五 フランスの詩人・評論家。象徴派の伝統を継ぎ、純粋詩の理論を確立した。

んに、「やあ。」と声をかけられる。知人が隣に腰かける。相手にならずに本を読むのは無作法である。しかたがないから本を閉じて話し相手になるが、その時はわりきれない気持であろう。少し話しているうちに相手も本を出す。話がとぎれたのを機会に向こうが本を読みだしてくれれば、思わずほっとして、自分も本を開くということになる。

夕方、家へ帰って来て、ろくに話もしないでいきなり本を読みだす夫に対しては、新妻などは泣きたくなるであろう。読みふける人間は孤独である。そして、そのような孤独は、親しい相手までも孤独にする。幸いに相手も読書の癖を持っていたら、話は簡単である。同じへやの中で、まるでけんかでもしたかのように、夫婦も子どもも別々に本を読んでいる。こういう時には、案外、平和は破れないのである。

子どものころ、わたしの家には、おとな用の本ばかりあって、自分むきの本があまりなかった。親類の家へ遊びに行って、子どもの本があると、思わずそれに読みふけって、けっきょく、ろくに話もしないで帰って来たことがよくあった。親たちは、いっそじゃまにならなくていいと思ったかもしれない。

相手が本を読みたがっている時には、なるべく静かに読ませておくこと、そして、できれば自分も本を読みだすこと。読書人の孤独を尊重するのも、時と場合によっては礼儀の一つである。

読書は、いやでも人間を孤独の状態におとしいれるが、共通に読んだ本の話は、この上もなく人間を親密にする。読書は、実は孤独の道ではなく、友を作る道であり、肉親や夫婦の仲を固める道である。共通の話題がなかなか見つからない場合に、ふと、本の話が出て、あれはおもしろいとか、感激したとか、それが共通の話題となったとすれば、あらゆるぎごちなさがけし飛んでしまう。意見が合わなくて、けんかになることもあるだろう。しかし、たいていは、それがもとになって、親しくなるであろう。

もしも相手が読んでいなかったら、その内容を説明しながら、こちらの感想を告げるがいい。簡単でもいいのである。ことに、自分が良いと思った本は、人に告げるべきである。自分の知らない本について聞かされたら、すなおに聞くべきである。そして、相手が推賞した場合には、「それでは読もう。」と受け入れるべきである。読むべき本を選ぶためにいちばんいい道は、読書の友を得ることである。いな、理想としては、すべての人間が読書の友となれるようになることである。

中島健蔵（一九〇三明治三六―）　仏文学者・評論家。東京に生まれた。東京大学仏文学科卒業。フランス文学の翻訳・紹介に努めるとともに、文芸評論や社会評論で広く活動し、多数の文化団体に関係して重要な役割を果たしている。著書に、『懐疑と象徴』『文芸学試論』『フランス文学入門』『読書』『昭和時代』など、翻訳に、ジイド『続プレテクスト』、バレリー『バリエテ』などがある。

この文章は、「現代教養全集」第十四巻（筑摩書房）から採った。

【学習ノート】

一　ここで筆者は、読書について、どういうふうに論を進めているか。

㈠　この文章は、いくつの段落に分けることができるか。

㈡　それぞれの段に、最も適切と思う見出しのことばをつけておこう。

二　「読み捨てどころではない。」（二九九・12）という文は、前のどの段落とどういう関係にあるのか。また、「……どころではない」という言い方は、前のほうのどのことばとの関係で用いられたのか。

三　筆者が本を読む時に試みている方法には、どんなことがあるか。あげてある順序に、その箇所箇所を抜き出しておこう。

【学習の手引き】

一　筆者が、『カラマーゾフの兄弟』や『武蔵野』などを読んだ時の経験を述べたのは、けっきょく何を言いたいためか。

二　筆者は、読書に対するどんな考え方から、この文章に「読書の孤独」という題をつけたのか。

三　めいめいのこれまでの読書体験について、

㈠　夢中になって読みふけった本や、途中で投げ出してしまった本の思い出。

㈡　自分が本を読む時に試みている方法。

㈢　どんな本を読みたいと思っているか。

などをめぐって、話し合ってみよう。

また、筆者の指摘する読書の孤独についての考え方に対しても、めいめいの意見を交換しよう。

40.12.19